

けいはんな市民雑学大学 講義記録

2008年6月21日(土)

うましところよ そのみかの原

恭仁山荘の内藤湖南先生

市民教授 うもと 兎本 しげひろ 恵宥

(内藤湖南先生顕彰会副会長)

1、 略歴

慶応2年(1866)秋田県鹿角郡馬毛内に生まれる。本名虎次郎、十和田湖の南であることから湖南と号した。生家は南部藩の家老桜庭家に仕える儒家で、祖父天爵が秀でた人であった。秋田県師範学校を卒業、小学校訓導になり2年を過ごし上京、雑誌記者となる。三宅雪嶺等の論説を代筆し、ジャーナリストとして頭角を現した。「萬朝報」「大阪朝日新聞」記者を経て、明治40年京都帝国大学文科大学に招かれ、東洋史学講座を担当する。このとき大学を出ていない、海外留学の経験がない経歴が原因で、2年間講師に留め置かれたのは有名な話である。

明治42年44歳で教授となり、43年文学博士、大正15年定年により退官、翌昭和2年瓶原の恭仁山荘に隠棲、9年69歳で死去した。

標題は、晩年佐々木信綱に師事した短歌

“うまし名ようましところよ妹とわが新室つくるそのみかの原” によっている。

(大正十四年十一月発行「心の花」第二十九卷第十一号)

2、 学問

東洋史学者としての業績は数多いが、中国史の宋以後の近世とする時代区分法は、いまでも支持を受けている。著書は、内藤湖南全集十四巻(筑摩書房)にまとめられている。

『支那上古史』『支那中古の文化』『支那近世史』『清朝史通論』『支那論』『新支那論』の六著で中国通史となり、一方に稀代の名著『支那史学史』がある。日本史関連では、『近世文学史論』『日本文学史研究』『先哲の学問』等があり、京大就任後初めての学術論文『卑弥呼考』は、邪馬台国論争の口火をきったものとして著名である。教育者としては有能な弟子を多数育成し、京大支那学派と呼ばれる学派を形成した。

また埋もれた人材を発掘するのに熱があり、中国清代の歴史家、章学誠の名著『文史通義』を発掘称揚し、本国の学界にも認めさせた。わが国江戸期の学者 富永仲基・山片蟠桃等の学問を熱心に紹介したのも知られる。

3、 その他

能書家であり特に細楷にすぐれ、書画の鑑識に長じたので、序跋を依頼されることが多かった。明末の「董其昌よりわしの方がうまい」と自慢したが、行草は別として楷書は確かに湖南が上である。

漢籍を主に五万巻と呼ばれる蔵書家であった。国宝三点重文五点を含む善本は、没後武田薬品に渡り、同社の「杏雨書屋」に蔵されている。他は京大人文研、愛知大学、関西大学に移った。

日露戦争以前から満州、本土に渡り、明治末年苦心して、清朝草創期の資料『満文老档』を全文写真に撮影し、わが国に招来した。資料を収集するのに労を厭わず、大正十三年には敦煌資料調査のため、ヨーロッパに旅行した。